



その生成物、誰が責任を取りますか？ AI ガバナンス入門



「とりあえず生成AIで作ってみました！」最近、現場からこんな言葉を聞くことが増えていませんか。

提案書、議事録、コードレビュー。気づけば、生成AIは新人からベテランまで、あらゆる業務に入り込んでいます。でも、その一方で、こんなモヤっとした感覚はないでしょうか。「これ、誰の判断なんだろう？」「もし間違っていたら、誰が責任を取るんだろう？」

その違和感に気づいたあなたは、とても重要な入り口に立っています。なぜなら今、企業に求められているのは「AIを使える人材」ではなく、「AIを信頼できる形で使える組織」だからです。このテーマを、少しだけ肩の力を抜いて、一緒に考えてみましょう。

AI ガバナンスとは

新人のAさんは、生成AIを使って顧客提案書を作りました。短時間で、見栄えの良い資料が完成。上司も「いいね、これでいこう」と即決です。ところが後日、顧客からこう指摘されます。「このデータの根拠はどこですか？」Aさんは答えられません。AIが出した内容だからです。上司も確認していませんでした。結果、その案件は見送りに。

さて、このとき問題だったのは何でしょうか。AIの精度でしょうか。それともAさんのスキルでしょうか。実は、本質はそこではありません。問題は、「AIの判断をどう扱うかが決まっていなかったこと」です。これこそが、AIガバナンスの話です。

「便利に使う」だけでは、いつか詰む

生成AIはとても優秀です。でも同時に、「それっぽく間違える」こともあります。しかも、人間が見抜きにくい形で。だからこそ重要なのは、「AIのアウトプットをそのまま使う」ではなく、どのようなルールで使うのかです。

どこまでAIに任せていいのか
どこから人がチェックすべきなのか
問題が起きたとき、誰が責任を持つのか

これが決まっていない状態は、例えるなら「交通ルールのない道路」を全力で走っているようなものです。速いけれど、いつ事故が起きてもおかしくない。AIガバナンスとは、この「交通ルール」をつくることです。

AI ガバナンスのポイント3点

難しく聞こえるかもしれませんが、やることは意外とシンプルです。ポイントは3つです。

1. ルールを決めること

たとえば、「対外資料は必ず人がレビューする」「AIの出力はそのまま使わない」といった基本方針

です。これがないと、現場は自由すぎて逆に動きづらくなります。

2. 役割を決めること

誰が使ってよくて、誰がチェックして、誰が最終判断するのか。ここが曖昧だと、問題が起きたときに「誰も責任を取れない状態」になります。

3. 流れを決めること

AIを使う→確認する→承認する。この一連のプロセスを、誰でも同じように再現できる形にすることが大切です。

この3つが揃うと、何が変わるでしょうか。実は、安心してスピードを出せるようになります。

ルールがあると、むしろ速くなる

「ガバナンスって、ブレーキじゃないの？」そう思われるかもしれませんが。でも実際は逆です。ルールがあるからこそ、人は迷わず動けます。

たとえば、「ここまではAIに任せてOK」と明確に決まっていれば、いちいち上司に確認する必要はありません。逆に、「ここは必ず人が見る」と決まっていれば、品質も担保できます。つまり、ガバナンスはスピードを止めるものではなく、スピードを出すための「道路整備」なのです。

研修担当者が握っている「最初の一步」

ここで、少しだけ視点を変えてみましょう。AIガバナンスを整えるのは、経営層やIT部門の役割だと思われがちです。もちろんそれも正しいのですが、実はもう一つ、見落とされがちな重要な役割があります。それが、研修担当者です。

なぜなら、AIの使い方は「文化」として組織に定着していくからです。そして文化は、最初に学んだ人たちによって形作られます。新人研修で、こんな問いを投げかけてみてください。「このAIの答え、どうやって確かめる？」「この内容、誰に説明できる？」たったこれだけで、AIに対する向き合い方は大きく変わります。

信頼は、あとからではなく「最初に設計する」

AIはこれから、もっと当たり前前の存在になります。だからこそ重要なのは、「問題が起きてから考える」のではなく、「最初から信頼できる形をつくる」ことです。難しいことを一気にやる必要はありません。まずは、小さなルールづくりからで十分です。ただし、その一步を間違えると、後から修正するのはとても大変になります。だからこそ今、「ちゃんと考えて始める」ことに価値があるのです。

そしてもし、「何から手をつければいいのか分からない」と感じているのであれば、それはとても自然なことです。AIガバナンスは、新しいテーマです。正解が一つに決まっているわけでもありません。だからこそ、他社の事例や実践的なフレームワークを知ることが、最初の近道になります。

株式会社インソース より

【M&A速報、コラムを日々配信！】X（旧Twitter）で情報を受け取るにはここをクリック

【M&A Online 無料会員登録のご案内】6000本超のM&A関連コラム読み放題!!
M&Aデータベースが使い放題!!登録無料、会員登録はここをクリック